

POLAND MONTHLY / BIULETYN POLSKI

ポーランド月報

1989年

10月号
(通巻91号)
400円

君たちの大統領 われわれの首相

A・ミフニク/K・モゼレフスキ

マゾヴィエツキ内閣の誕生

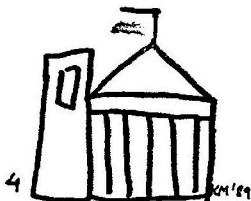
「連帯」在外調整局のコメント



左よりマゾヴィエツキ、ワレサ、ゲレメク

君たちの大統領 われわれの首相——「連帯」政権をめくって

君たちの大統領 われわれの首相……………	3
アダム・ミフニク	
あまりにも危険な「大連立」……………	4
カロル・モゼレフスキ	
われわれはこう考える……………	6
議員アンケート	
マゾヴィエツキ内閣の誕生……………	8
「連帯」在外調整局のコメント	
☆国民全員の一致した努力を……………	9
マゾヴィエツキ首相の就任演説（要旨）	
経済再建には西側資本が必要	
ズビグニエフ・ブヤク氏に聞く……………	10
歴史の曲がり角で……………	12
ワルシャワ報告：工藤幸雄	
僕が見た「連帯」……………	16
ポーランド・スタディツアー：木村元彦	
ポーランド日誌 1989年6月24日～8月24日……………	20



Rys. Kaj Malachowski

円卓から国会へ

君たちの大統領、われわれの首相

「連帯」政権をめぐる

【編集部注】 6月の総選挙後、ヤルゼルスキ將軍の「大連立」=「連帯」議員の入閣要請に対し拒否の姿勢を取ってきた「連帯」が、7月に入ると「首相職確保による政権形成」を前面に打ち出し始める。7月1日の市民議会クラブ議員総会でヤツェク・クローンが「連帯」主導政権を提唱し、7月3日付の「ガゼタ・ヴィボルチャ」1面トップにはアダム・ミフニクが「君たちの大統領、われわれの首相」と題する論説を書いた。これに対し、3日後には同じ「ガゼタ・ヴィボルチャ」紙上で「連帯」議員のカロル・モゼレフスキがミフニクへの反論を展開。その後の事態の進展は周知の通りである。本誌今号ではこのミフニクの論説とモゼレフスキの反論、およびミフニク提案に対する幾人かの議員のコメントを訳出する。 【訳：高橋初子】

君たちの大統領、われわれの首相 アダム・ミフニク

Wasz Prezydent, Nasz Premier, Adam Michnik
Gazeta Wyborcza nr.40, 3 lipca 1989

まもなくポーランドの〔新しい〕政治体制が決まる。今のところ最も世間の注目を集めているのは、誰が大統領候補者になるかである。現状において、過去の記憶とレトリックが先行していることは不幸と言わざるをえない。状況を冷静に見て、答えを捜してみよう——「今後の数カ月、数年にポーランドが必要としているのは、どんな政治体制なのか？」

経済状態は破滅的である。社会不安や騒乱が国を脅かしている。選挙での「連帯」の圧倒的勝利は、ポーランド国民が根本的变化を求めていることを見せつけた。レフ・ワレサの大統領選への立候補を求める声も、同じ意味を持っている。

「連帯」委員長はこれに対して何と答えたか？ 彼は国内・国際情勢の現実を人々に説いた。ポーランドの東と西と南の隣国について、国内の抑圧装置（内務省、国防省）について思いをめぐらすように説いた。これらの状況について考えてみることにしよう。

世界の中でわれわれの属する陣営では、全体主

義的共産主義の反対者と守護者との激しい抗争が続いている。ソ連で非スターリン主義化が進行中なのは、時代の重要なきざしだ。反全体主義の圧力の結果ソ連で生じている変化は、ポーランド国民とソヴェト国民の共通の目標が、スターリン主義の遺産を打破し民主的秩序を建設することであると証明している。ソ連では市場経済システムと集団農業解体の方法の追求が進められている。民族文化や自由と尊厳を求める人々の希求が目覚め始めた。

ポーランドの努力はこれに似ていないだろうか？ これらは、われわれの利害の一致する平面ではないだろうか？ それゆえ、ポーランドでの変化はロシア民族の利益も、ソ連邦内各民族の利益も、脅かすものではない。ポーランドの変化はスターリン主義的全体主義的共産主義に狙いを定めたものだ。昨今のポーランドに広く見られる反ロシア的恐怖症のスローガンは、（観察者たちにより克明に記録されているが）、考え方の方向づけを誤った結果か、あるいは変化に反対する人々

の挑発によるものでしかない。

東ドイツとチェコスロヴァキアでは違っている。この両国ではソ連の新聞が没収され、改革派の要求は抑圧されている。

モスクワはポーランドをどう見ているか？ 全体主義体制から議会制民主主義への移行プロセスに関する、壮大かつ重要な実験室としてである。われわれの敗北はスターリン主義への回帰をめざすモスクワの人々を力づけ、われわれの勝利は彼らを打ち砕くことになる。

さて、どのような方法を取れば、民主主義的運動が革命も暴力もなしにスターリン主義ノメンクラトゥラに勝つことができるだろうか？ 私はあえて断言しよう、それは民主的反対派と、権力機構内の改革派とが手を結ぶことによるのみ達成される、と。ポーランドでは今その可能性が目前にある。考えてもみよう、全体主義的共産主義からの脱出は容易なことではない。かつてそれに成功した国はない。従ってわれわれは、前例なき行動を取らねばならない。

ポーランドに今必要なのは、強力で信頼の置ける統治体制である。うわべだけの变化では不足であり、大統領や首相の候補者を別の顔に変えるだけではすまないのだ。だから私は、ヤルゼルスキ將軍やキシチャク將軍の個人的資質を検討しても意味はないと言いたい。幾年にもわたり私は彼ら2人を公然と非難してきた。今では彼らについて、良い点も多く挙げるができる。しかし問題なのは個人ではなく、メカニズムである。



アダム・ミフニク

JERZY KOZAK

新しい体制が、主要な政治勢力すべてによって容認されることのできる体制が必要とされている。新しい、しかし継続するという保証のある体制が。

統一労働者党からの候補者を大統領に選出し、一方首相と組閣は「連帯」系候補者に委ねるという内容の協定は、上述のような体制になりうる。

このような形で選ばれた大統領は体制の継続性の、そして国際条約や軍事同盟の存続の保証になろう。そして政府は、ポーランド国民の大部分からの巨大な委任を受け、経済・政治体制の一貫した改革を保証することになる。このような統治体制のみが、「大連立」というスローガンを実際に実現でき、国家経済再建のためのしかるべき援助を受け取るチャンスを持つ。これはポーランドにとっても世界にとっても信頼できる体制となろう。

あまりにも危険な「大連立」

カロル・モゼレフスキ

Nie Robmy Rządu. Nie Idźmy Stąd. Karol Modzelewski
Gazeta Wyborcza nr.43, 6 lipca 1989

7月3日の夕方には、その朝のアダム・ミフニクの論説「君たちの大統領、われわれの首相」が「連帯」の立場を代表するものではなく、彼の個人的見解であることをすべての人が知っていた。しかしアダム・ミフニクは、常に議論に値する見

解を発表する論客の1人であり、今回彼によって提起された問題は真剣に検討すべきものである。

読者の大部分は、ミフニクの論説の結論は「連帯」による政権獲得提案であると理解したに違いない。しかし私は、これは基本的に例の「大連立」

の新しい異種版であると考える。

第1に、そのような内閣の構成は連立内閣にならざるを得ないと私は考える。ミフニクにしろ、また7月1日の市民議会クラブの総会で同様の考えを述べたクーロンにせよ、おそらく国防相、内相、外相に反対派の人物が就けるとは考えていないだろう。軍、国内治安維持、外交に関する事項は円卓会議によって大統領特別権限に定められたが、これは十分な理由があつてのことである。少なくとも、政治権力の鍵をなすこの3つの大臣職だけは共産主義者によって、そして軍に支持されワルシャワ条約機構内で不信を招かない人物によって、占められなければならないことは疑う余地がない。

第2に、そのような政府は議会内の3党連合に支持されねばならない。「連帯」は下院の35%を占めるのみであり、他の会派との連合なくしては「われわれの首相」の任務遂行は不可能である。統一労働者党に少なくとも3つの大臣を渡す以上、必然的にわれわれは党と連合せねばならず、おそらく統一農民党および民主党とも連合する必要が生じよう。この状態とヤルゼルスキ將軍の提案した「大連立」との違いといえば、「連帯」が副首相でなく首相に就任することと、その他いくつかの大臣の椅子だけである。その違いは質の違いというよりむしろ数の違いである。

第3の、そして最も重要と思われることは、反対派政治家に組閣を委ねたとしても、反対派系大臣に対する権力執行機関の姿勢は変わらないということである。1~2週間前にヤツェク・クーロンが「連帯」の人々の入閣に否定的な意見を述べた際にあげた理由も、まさにこのことであつた。権力機構にとってわれわれは異分子である。それゆえ実際問題としてわれわれは何ひとつ統御することができず、それでいてすべての責任は負わされることにならう。ミフニクの論説でも、市民議会クラブにおけるクーロンの発言でも、彼らがなせ以前のこうした見解を翻すに至ったかの説明はなされなかった。首相の座を手に入れるだけでは何も変わらないのだ。「異分子」の首相はノメンクラトゥラによって「異分子」の大臣と同様に扱われるだろう。



カロール・モゼレフスキ

こうした状況下では、「われわれの」首相に対する統治機構の恭順を保証するのは「彼らの」大統領だけである。しかしこのことは、憲法修正によって既に広範な権限が与えられている大統領が、さらに行政権のすべての手綱を握ることを意味する。首相も大臣も、大統領のとりなして部下が政府の決定を遂行するように保証してもらえない限り、統治できないことになる。閣僚評議会〔内閣〕は、見かけだけのとは言わぬまでも、椅子を与えられただけのものとなり、前任者たちのもたらした経済破綻の巨大な責任も一緒に背負わされることにならう。

あらゆる面での民主化が進み、それによって党ノメンクラトゥラ統治機構が超党派の実行組織へと変化しない限り、事態は上に述べたようになっていくだろう。こうした変化がまだである以上、「君たちの大統領、われわれの首相」作戦は、「連帯」に損失をもたらす現政権に信用を与える結果にしかならない。

「大連立」構想は、われわれの直面しているジレンマに解答を見つけようとの試みである。経済危機はわれわれの考えていたよりも深刻なことが明らかになった。円卓ではなく豪勢に飾られたテーブルを約束してきたのに結局は生産と市場を今の状態に陥れた、その張本人たちを非難するだけではすまない。国が必要としているのは、人々にとって愉快ではない決定を実行に移すために不可

欠な、社会の協力を得られる政府である。今日では恐怖で社会を従わせようとする事は不可能である。必要なのは権威だが、これは権力側よりも「連帯」が持っている。われわれは、この「円積問題」〔不可能な試みの意〕の解答を捜さねばならない。

残念ながら、アダム・ミフニクの提案した解決法は私には良策と思えない。短期間で目に見える成果を上げる具体的かつ現実的な経済プランや、うわべだけでない本物の共同統治を保証するメカニズムなくしては、彼の言う方法は長く続かないだろう。そして、「連帯」の権威の急速な失墜という取り返しのつかない危険な結果が生じかねない。

い。

社会のかなりの部分にとって、「連帯」と、人々に選挙され信任された政治構造とは、最後の望みである。もしこの希望が崩れ落ちれば、後に残るのは絶望と攻撃性だけであり、平和的で民主的な漸進的变化のチャンスは失われる。

「大連立」はあまりに危険が大きすぎる。この危険な賭けに乗り出して良いのは、国民と国家が存亡の危機にさらされて他に取るべき道がない時、そして救いの道がわかっており、それを実行するためのしかるべき政治的保証がある時のみである。現状がこの条件にあてはまるとは、私には思われない。

われわれはこう考える 議員アンケート

“Wasz Prezydent, Nasz Premier” Co sądza po słowie?
Gazeta Wyborcza nr.42, 5 lipca 1989

【『ガゼタ・ヴィボルチャ』編集部注】 本誌40号の「君たちの大統領、われわれの首相」でアダム・ミフニクが示した見解に関してどう考えるか、何人かの議員に質問してみた。以下はその回答である。

ヤヌシュ・オニシケヴィチ (連帯) それほどいい考えとは思わない。彼の言う解決策に反対する論拠はどれも強力だ。そういう行動に出る時機はまだ到来していない。ただ、おそらく数ヶ月のうちにはそうなるだろうが。

スワヴォミル・ヴィアトル (統一労働者党) あれはアダム・ミフニクの個人的提案と考えている。市民議会クラブとしてそのような提案を出したとの話は聞いていない。似たような提案なら私でもいくらでも出せる。

ヤン・ヤノフスキ教授 (民主党) 私個人の立場で言わせてもらえば、あの提案は非常に興味深いもので、〔統一労働者党、統一農民党、民主党の〕

3党連合側でも検討すべきだと思う。何故ならあの提案は、反対派が国に対してのみならず政府に関しても共同責任を担うという、現在求められている姿へ向けての、大きな一歩であるからだ。

アルトゥル・バラシュ (市民議会クラブ) 回答はさし控えたい。

アレクサンデル・ウチャク (統一農民党) 前もって取り決めをしてはどこへも行きつくことはできない。現今の投票の経過に見られるように、取り決めは議場ではじめて検証される。現在の政治的な力のバランスからいって、役割を分ける必要が生じている。その点であの提案は極めて重要だ。反対派には言いたいことが山ほどあるだろう。もちろん、政府は「連帯」の人々だけで構成されるのではなく、実際の勢力分布を反映したものになるのが最良と思う。

ヤン・リティンスキ (連帯) アダムの考えは現実的前提条件に基づいている。実際、古い政府や

古い体制はもはや機能せず、統治できない状態にある。3党連合は先の選挙で完全に敗北した。従って、これまでの反対派が権力を取る——「連帯」の首相を戴くのは論理的なことだ。こうした体制は一定の条件ではうまく機能することができるだろう。しかしわれわれが下院の多数派を形成していない時点では、この体制はわれわれにとって不利に機能しよう。

われわれは十全な実行力を持つことなしに、失敗の全責任を負わされて非難されることになる。われわれは議会である種の多数派を形成できるようになるまで待つべきだ。現時点ではこれは統一労働者党を反「連帯」の立場で團結させることになり、権力機構や反改革派を強大化させる危険がある。従って当面は、答えはノー——しかし、後になってからでは遅すぎるであろうことを私は自覚しているのだが。

ミコワイ・コザキエヴィチ（統一農民党、下院議長） これまでに3党連合側が出した諸提案の中に、大連立、すなわち、すべての政治主体による共同統治の提案も存在した。一部の人々のグループでは、「非政治的」首相や、専門家内閣についても検討が行われた。3党連合側では「連帯」内閣が話に上がることはなかったが、これまでのイニシアティブから、何らかの折衝を行う道は開け

ている。これは突然にどうにかなるといった類の問題ではない。この提案が実現されるチャンスがどの位かを評価するのは難しい。いずれにせよ、それは私の仕事ではない。

ヤツェク・クーロン（連帯） 現状を解くカギは行政府の手にある。強力な政府を形成できてはじめて議会は有効に仕事を行うことができる。強力な政府とは、社会に信頼されるとともにいわゆる財界にも信頼されているという意味だ。3党連合がそのような政府を形成できるか？ 私はできるとは思わない。「連帯」ならどうか？ これまで私を含め多くの人々がその問題についてさまざまな難点をあげてきたが、それでもなお、私は「連帯」ならできると思う。「連帯」政権の誕生は、3党連合の人々の多くが「連帯」政権を「自分たちの利益にかなうもの」と認めてはじめて可能となる。それが円卓会議合意の論理なのであり、われわれはそれを侵害してはならない。

この意味で、ミフニク提案と名付けられたわれわれの提案は、要求とか「連帯」からの最後通牒といったものではなく、むしろ政治的可能性の提示である。私はさきにも市民議会クラブでも、また「クリエル・ポルスキ」とのインタビューでもそのように言っている。



国会の議場でワレサ（右）とクーロン（左）。

マゾヴィエツキ内閣の誕生 - 「連帯」在外調整局のコメント

Our New Premier Mazowiecki,
Comment by the Coordinating Office Abroad of NSZZ Solidarność,
NEWS SOLIDARNOŚĆ, No.138,31.8.89

東側世界で初めての独立労働組合「連帯」の誕生以来9年たった現在、ポーランドはもう1つの歴史的転換点に立っている。「連帯」の闘いの結果として、タデウシュ・マゾヴィエツキがワルシャワ条約機構諸国で初めての非共産党員首相に選ばれたのだ。

8月24日、ポーランド下院は賛成378票、反対4票、棄権11票（大半は統一労働者党議員）でマゾヴィエツキの首相任命を承認した。マゾヴィエツキは、62歳、法律家にして職業的ジャーナリストで、1950年代以来カトリック知識人の反対派グループに所属した。1980年8月のグダンスク造船所ストライキ以来のワレサ委員長の最も緊密な顧問の1人として、彼はこの2-4月の円卓会議交渉で労働組合複数制委員会の「連帯」側代表を務めた。その後首相に選任されるまでの間、「連帯」の中央機関紙『週刊連帯』の編集長の地位にあった。これは、1981年12月の戒厳令まで彼が就いていた地位でもあった。

彼の首相選任は、何よりもまず、独立自治労働「連帯」の偉大な勝利である。ポーランドと世界の多くの人々は、つい数カ月前まで、この組織はもはや存在しないと考えていた。ところが、その「連帯」が6月の選挙で大勝を収め、その後、多くの人々からまだ国を治める能力はないと見られていたにもかかわらず、首相を出すまでになったのである。「連帯」は、ポーランドを全体主義の下から救い出して独立と民主主義へと導くことができる、強力な政治的勢力であることが認められなければならない。

マゾヴィエツキの首相選任はまた、1970年にバルト海沿岸で、1976年にラドムで、1980年8月に全国で、そして1988年5月と8月に全国で決起した労働者の闘争の正しさを証明するものである。

これらの闘いを結ぶ赤い糸は、労働組合と政治と経済の分野における複数制度、基本的人権と社会的権利、そして何よりも民主主義の要求だった。この8月の事態の展開は、これまでに「連帯」が経て来なければならなかった弾圧の数々、とりわけ「連帯」の暴力的解体の試みに他ならなかった1981年12月13日の戒厳令の布告を考えれば、いっそう注目すべきである。過去10年近く、「連帯」の組合員と活動家は、独立と人間らしい生活を求める4,000万ポーランド人の希望を実現するために、きわめて困難な条件の下で、時には生命の危険さえも冒して闘ってきた。今日、この目標の実現を現実的に考えることができる。

勝利の代償として、「連帯」は新しい責任を全面的に引き受けなければならない。ポーランド経済は深い危機の泥沼にはまりこんでいる。いまや社会は「連帯」がその解決策を見いだすことを期待している。「連帯」は、まさにその本来の性質のゆえに、勤労者大衆の日々の要求に敏感でなければならない。しかも同時に、自由市場システムの要求に応えることのできる構造的な経済改革を実行しなければならないのだ。

「連帯」はつい最近まで共産主義者に対して改革を要求してきた。いまやこの任務は「連帯」政府自身が引き受けなければならない。この夏の事態の展開は円卓会議合意の範囲をはるかに越えている。誰も予想しなかった急速な、しかし驚くほど平穏な政権移行によって、経済的にも政治的にも不安定な極度に緊張した条件の下で、「連帯」は国家の責任を負うことを強制された。6月の部分的な自由選挙によって、ポーランド社会は「連帯」に明確な信任と権限を与えた。マゾヴィエツキを首相に持ったことによって、「連帯」は彼の政府が平和的な、民主的な変化を通じてこの権限

を効果的に活用できるよう、最大限の努力をしなければならない。

ポーランドにおける変化はソ連圏内の隣国にも直接的な影響をおよぼす。ポーランドで進行中の過程は、ソ連とハンガリーで起こりつつある政治的变化に直接的に影響し、また民主的改革に抵抗する諸国内で生まれようとしている独立した反対派運動に対して全体主義から民主主義への海図なき航路の導き役を果たす。民族の主権と民主主義の要求が東側世界の全域で掲げられ、より人間的な新しいヨーロッパをめざしてかつてない地平が開かれつつある。〔訳：水谷 駿〕



マゾヴィエツキ首相

国民全員の一致した努力を

マゾヴィエツキ首相の就任演説（要旨）

Mazowiecki Addresses Parliament,
NEWS SOLIDARNOŚĆ, ibid.

ポーランド人は自らの経済問題を自ら解決しなければならない。その成否は自らのエネルギーと努力にかかっている。しかしこのことは、この困難な仕事においてわれわれが孤独を強いられる、という意味ではない。

世界はポーランドを共感と期待をもって見守っている。ポーランド政府は、可能なかぎりのあらゆる形態による国際的な経済的援助を積極的に求め、経済の活性化が進むにつれ可能なかぎり多額の援助が与えられることを期待する。

法の支配と合法性が重要である。ポーランドでは過去45年にわたって司法制度は政治的目的のために利用されてきた。このために、平均的市民たちが自由を享受できず、万人の平等を保障する法律の保護を受けられない構造が作り出されてきた。法の支配を確立し、こうして市民に対して国際的な条約や取決め、合意に従ってその権利を保障することが絶対に必要である。

ポーランドは、欧州の政治的、経済的、文化的生活に重要な役割を果たしうると確信する。だが、現在の経済情勢は、国際的関係に関する限り好ましい状態にはない。ポーランドと先進諸国との間の文化的水準のギャップが拡大しつ

つある。ポーランド人はそのためにやる気を失い、外国移住者 とくに青年層の——が急増している。

ポーランドの友人たちはぜひ理解していただきたい、ポーランドが滅亡に向かうのを待っているのではないということ。ポーランドの経済的復興は、われわれにとってだけでなく、ヨーロッパ社会全体にとって重要である。

新政府が引き継ぐ負債は、新政府には何の責任もない。それにもかかわらずそれは新政府の政策に大きな影響を及ぼす。われわれは過去とははっきりと一線を画すつもりである。われわれは、ポーランドを現在の危機から救い出すための政策に対してのみ責任を負う。

わが国民にとって現在の最大の問題は、状況が改善されるか否かである。解答はともに探し出さねばならない。新政府が成功するか否かは社会全体の理解と協力にかかっている。政府だけで祖国の復活が可能だとは期待してはならない。ポーランド人が力を合わせる必要がある。全国民が一致して努力する場合のみポーランドは新しくなる。

〔訳：水谷 駿〕

経済再建には西側資本が必要

ズビグニェフ・ブヤク氏に聞く

Rozmowa z Z.Bujakiem

【編集部注】 7月末から8月初めにかけ、「連帯」マゾフシェ地区議長ズビグニェフ・ブヤク氏が原水禁世界大会参加のため来日され、資料センターでは8月8日に氏を招いて話を聞いた。その際の質疑応答の要旨を以下に掲載する。なお、文責は編集部。

[訳：高橋 初子]

「連帯」政権の可能性

問 選挙後、統一労働者党の政府が組閣できずにいるようだが。

答 われわれが反対しているのは、これまでの政策で国を破綻させた統一労働者党の同じ顔ぶれが、相変らず政権を握っているからだ。「連帯」側で言えば、下部の地方組織のいくつかは既に「市民議会クラブが政権を取るべし」との内容の声明を出しており、1～2週間中には「連帯」中央組織も同様の声明を出すだろう。統一労働者党政権は、経済改革、市場経済導入と言っているが、経済政策に一貫性がなく、法律面や行政面での関連措置もきちんとしていない。一方「連帯」側は今年初めに「ポーランドの経済の将来とその方針」という決議文で、ノメンクラトゥラの排除、外国資本の導入のための環境整備、国家予算の抜本的見直しを通じての財政赤字の解消などを打ち出した。赤字解消の財源としては、軍・警察関係予算の削減、投資見直し、国有財産（土地、工場、住宅等）の売却、国債発行、証券発行などが考えられる。これらの点で効果が上がれば、労組としても失業その他の「痛み」を引き受ける用意がある。

問 赤字の原因の1つである食品への補助金が廃止され、食料品価格が急騰したようだが。

答 あの政策は非常に悪い形で導入された見本

だ。物が無いのに価格を自由化すれば、値段は上がる。それに、食料品価格だけ自由化しても、生産に必要な農機具、肥料などが供給されなければ生産は向上しない。統一労働者党の政府では、誰が首相になっても同じことだ。一方、「連帯」下部組織からの情報では、「連帯」政権なら人々は我慢するが、他の政権なら我慢しない、という感触も得ている。「連帯」政権になれば、国の改革への大きな保証が生まれる。

外資導入で経済再建

問 ブッシュ米大統領のポーランド訪問やバリ・サミットで対ポーランド援助が言われ、ポーランド側が「額が少ない」と言っているようだが、どれくらい援助があればいいと考えているのか。

答 その点については専門家の話を聞いていないので個人的意見になるが、重要なのは西側企業が多数ポーランドに進出してくれることだ。西側の銀行や企業が入ってくれば、次第に商品供給も改善されると思う。現在ポーランドでは国民の資産が信じられないほどムダ使いられている。だから、例えば鉄鋼産業などでは比較的わずかな投資で品質向上が実現できるだろうし、鉱業でも採掘量の増加が見込め、農業も構造改革でかなりの伸びが期待できる。サービス業はほとんど手つかず（第三次産業従事者の比率は7%位）なので、大きく伸びると思う。そのへんを西側銀行に是非調査してもらいたい。また、一般家庭に総計70億ドルとも言われる「タンス預金」があるが、西側の信用ある銀行が支店を開設すれば市民は預けに行くだらう。

問 日本に対する期待もその方向で？

答 日本は奇跡的経済成長で知られており、また西ドイツなどと違ってポーランドに政治的利害

を持たないのでポーランド国民に危機感なく受け入れられるはずで、有利な立場にいる。

問 日本のODA（政府開発援助）や民間直接投資は、ほとんどの場合相手国の国民経済の自立化に役立っていない。「連帯」はその面でのチェック機能を持ちうるのか？

答 われわれは労働組合と市民議会クラブの両方を持っているので大丈夫と思う。

問 アジアの国、例えばフィリピン、マレーシア等に貿易輸出自由地域というのがあり、外資導入のために優遇措置を取っているが、結果的には国民経済の発展に役立たず経済的従属性を増すだけになっている。公害にしても、日本国内では規制を守る企業がアジアの国では相当ひどいことをしている例がある。

答 ポーランドではそういうことはないように、こちらで規準を決めるつもりでいる。公害規制等は、数年以内に国内企業にも守るようにさせる。そのためにも、多数の西側企業がポーランドに来て互いに競争してくれることが必要だ。そうすればズウォティの価値も上がる。

問 外資に依存する形で国民経済の自立的發展は可能なのか？

答 ポーランドの現状で他に方法があるなら教えてほしい。国内資本はごくわずか、東側から資本が来ることもない。

問 「連帯」に外資導入のための理念、ガイドラインのようなものはあるのか？

答 外資をそんなに恐れる必要はないと思う。給料は上がるし、労働環境や安全性もポーランドの現状は西側の現状より数倍悪い。公害にしても、わが国ではいまだに廃液は川にたれ流しだ。労働の搾取についても心配はしていない。現在ポーランドのほとんどの労働者は生活のため長時間労働をしているのだから。

ポーランドは安定した国

問 将来西側との関係を強めるにしても、コモコン諸国との関係も残るわけだが。

答 コメコン内部でも変化が生じており、相互の決済がハード・カレンシーで行われる方向へ向



かっている。西側との経済関係強化を阻害する政治要因はない。

問 「連帯」政権との関連で言えば、資本家の投資決定に際しては、相手国の政権がどれくらい民主的かより、どれくらい安定性があるかの方が重要なのだが。

答 政権は変わるにしろ、ポーランドは国全体の安定性という点では非常に安定しており、国民のコンセンサスができています。円卓会議の話し合いにより事態をここまで持ってきたポーランドという国は、非常に安定した国だ。議会にわれわれが野党勢力として入ったことで、争議の場が工場から議会へ移った。この政治環境の変化はモスクワも承認しており、モスクワが方針変更しない限り、東側からの危機はない。この点でヤルゼルスキを大統領に選んだことが大きな意味を持っている。彼はポーランドの指導者の中で最もクレムリンに信頼されている。また彼が大統領就任とともに党の役職から退いたことは、権力が党から国会へ移りつつあることを意味し、大きな重要性を持つ。こうした安定要因を脅かすものとしては、チェコの状況を最も心配している。チェコでは改革が行われていないし、わが国の円卓会議や野党組閣の動きに最も強硬に反対したのがチェコだったと、党高官筋から聞いている。ただ、モスクワはチェコが改革路線に入るよう望んでいるようだし、チェコ社会からの改革の圧力も高まっているので、いずれ改革の道へ進むだろう。

歴史の曲がり角で

ワルシャワ報告——上藤 幸雄

Report o Warszawie, Yukio Kudo

「禁じられた歌」は蘇った

10日間の滞在はあっけなかった。帰る前日によくやけてきた暇の日曜日を利用してタクシーで往復六百キロの旅に出たのが、唯一の旅らしきであった。訪れた先はヴィスワ川沿いのカジミェシュ Kazimierz とザモシチ Zamosc という歴史に古い2つの街である。

カジミェシュに入ると、川に向かって並ぶ中世の名残りの倉庫の破風に1591の文字が見えた。ヤン・カジミェシュの時代に穀物の積み出しで栄えた街なのだ。共用井戸を真ん中に四角の広場の周囲に並ぶ時代を経た建物が、ささやかながら繁栄のよすがをとどめるように見えた。その繁栄は20世紀を終える今、どこに求めればよいのか。

Za chleb, za wolność, za nową polską

パンと自由と新ポーランドのため

Janek Wiśniewski padł

ヤネク・ヴィシニェフスキは倒れた

聞きなれたメロディーが土産物屋の店から流れしてきた。ああ、あの歌だ。「連帯」時代に歌われた闘いの歌——それを初めて耳にしたのは、1971年、「12月事件」から1周年の夜、どこか詠歌調ともいえる癖の強い自由ヨーロッパ放送のアナウンスに続けて、下手くそな合唱で歌われたのを、確かに聞いた。81年に再び耳にして、これならどこかでいつか聞いたと思ったのはそのせいだ。

89年9月3日、ここで今、その歌声を聞くのは単なる偶然とも思えなかった。運命的な偶然と呼べばいいのか。店に入って訊くと、出たばかりの最新盤と言われて、2枚を買った。1枚が3,500ズロチという値段である。

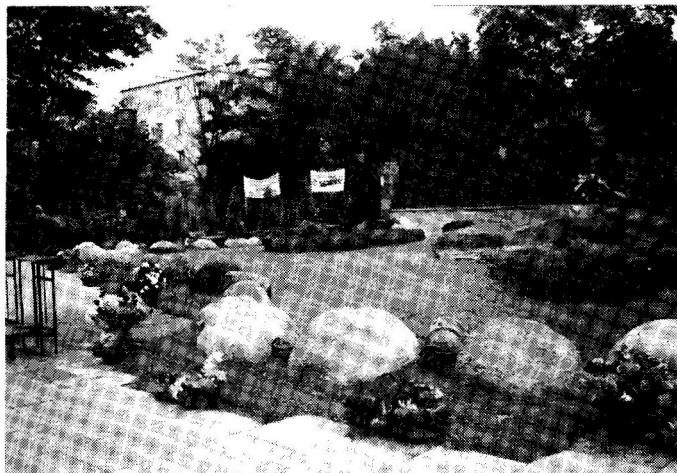
戒厳令、「連帯」弾圧から8年足らず、「禁じられた歌」は再び生き返った。戦争中に生まれた

抵抗歌が、禁じられながらも歌いつがれたように、そして終戦と同時に公然と街に響いたように、歌は新しい命を吹き返した。パンと自由と新ポーランドのため／ヤネク・ヴィシニェフスキは倒れた……。

ザモシチからルブリン経由でワルシャワへと帰路を急ぐタクシーの中で、こんどはラジオからもういちど偶然の歌声が聞えた。オルドンカ Ordonka の歌う戦前の旧盤、懐かしのメロディーのひとつである。「愛はすべてを許す」の歌い手として最も知られる彼女は、たしかペイルートで死んだ（調べてみると、没年は1950年、享年16歳。「ポーランド第2軍団」に同行した子供らの世話役として、近東に赴いたもの——と「ポーランド大百科」にある。「第2軍団」Drugi Korpus Polski とは、のちに北アフリカ、イタリアに転戦して「連合軍」の一翼をになったアンデルス将軍の軍隊、ポーランド人捕虜・抑留者・強制収容所の囚人を集めてソ連で創設されたが、スターリンの意向に逆らってタシケントから脱出した。部隊編成のために不足した将校の行方を求めて、将軍はしきりにカティンに消えたポーランド人将校の消息をソ連側に要求した。ソ連に離反した最大の動機は、スターリンへの抗議であったに相違ない）。

ラジオの解説者は、オルドンカの最後について何も語らなかったが、察するに、ティシキエウィッチ伯爵夫人の身である彼女は、戦後のポーランドの行方を憂慮しながら、あの若々しく可憐な声のまま、遠方の地で果てたのであろう。その病床にはロンドンに亡命のアンデルス将軍からも、手厚い見舞いの便りが幾度か寄せられたかもしれない。歌のなかで「聖アントニ」に呼びかける彼女の肉声は艶やかだった。

残念なのは、アンデルス将軍も、将軍に従った将兵も、その家族（強制移送でシベリアや奥地など



ヌタニヌツフ・ヌトカ教会のボビエシロ
神父の墓。「連帯」非合法時代には周囲の墳
を埋めつくしていた「連帯」横断幕がほん
とテラスに取り払われ、静かに荘厳なはずま
い(になら)る。(写真：工藤正博)

にあった女・子ども混じる1万人が同行した—
拙著「乳牛に鞍」29頁)も、ましてオルドンカ
も、半世紀後のポーランドの「再生」を知るべく
もないことだ。

「シラフタとは武士のことだ」

梅田芳穂君の紹介で、このHいちにち、われわ
れを乗せて走ったPan Janつまりヤンさんは一見
して70歳をはるかに越えた年齢とだれしも思うに
違いない。マゾヴィエツキ(新首相)と高校で同
級だと知らされていてさえ、どうしても61歳とは
考えられない。

「マゾヴィエツキって、どんな人でしたか、若
いころは」と尋ねても、はかばかしい返事はなか
った。同級というより、隣のクラスにいた目立た
ぬやつを思い出すふうなのだ。耳が遠いよ、顔
を向けて話さない、と後ろの席から家内が注意
を促したのは、いちどだけではない。

「いま、家の修繕をやってまして、背骨が悪い
もんで、屋根の下の天井で腰をかかめているのが
大儀でね、でも、いい運動になる」。

腰だか、背骨だかを痛めたのは戦争中のことと
あとで知れた。「戦争が始まったのが13の年、そ
の2年後にはAK(国内軍、ロンドンの亡命ポー
ランド政府系の武装抵抗組織)に加わった。父親
が退役の騎兵将校でね。家の地所には畑仕事用の
馬が20頭、それに騎兵隊のために預って育てる
馬もいて、子供のころから乗馬は得意だった。馬
はかわいいもんだ」。ヤンさんは、動物好きで、
道に犬を見かけるごとにスピードを落とし、なに
やら声をかけてやる。「わしは車でワンちゃんを
引っかけたことはない、家にも犬がいるからね」。

「そんな土地持ちなら、お宅は代々のszlachta
(小貴族)ですね」。

「そうとも。しかし、szlachtaってなに分かる
かね」。答えあくむ問もなく、彼が言った。「szlachta
はサムライのことだ。だからhonorを大事にする。
戦争に出て戦ったのもその名譽のためだよ」。

どこそこの激戦でAKの部隊の大半以上を失い
などなどの細かな話は繰り返さない。頭に収
めた言葉だけを綴っておく。走るベンツのなかで
回した録音テープを聞き直すまでもなさそうだ。
話がきれぎれに飛躍しているのは、もとの話し方

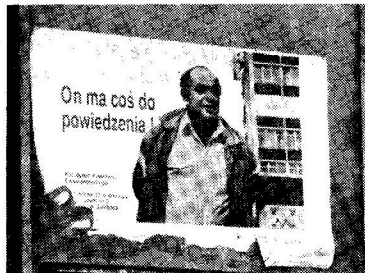
のせいである。

去年夏の水谷曉君のポーランド訪問、その前の前野良先生の訪ポ、いずれもこのヤン老人が案内したらしいことが分かってきた。「くれぐれもよろしくおっしゃって……」。日本語に直せば、そのぐらゐの丁寧さと懐かしさを横顔と声調に見せながら老は言った。結局、ポーランド資料センターのメンバーは、その都度、このベントウのお世話になっているわけだ。話がポビェウシコ神父の死に転じた合間に、はくのほうから「私の仲間が英語で書かれた神父の物語を訳している」と言ったとき、「ああ、彼なら知っている。いい人だった。ほかに、2人連れてきた人たちも、えらく熱心で、静かで、まじめで……」。このあと、今のあいさつがあった。

ポビェウシコさんが殺されたときに、警察の指示通り車を止めた運転手が警察の逆宣伝で「警察の密通者」であるかのように仕立てられ、それを信じこむ人も少なくなかったことから、親しくしていた司祭の謀略死のショックに重ねて、悪宣伝のいやらしさに耐えきれず、その運転手は自分のあいだ、魂が脱けたようになった。あの事件以来もカトリック教会の指導者の聖職者に対する迫害はつづいて、4人の司祭が謎の死をとげたし、総じて秘密警察によると見られる政治的な暗殺は現在、百件にもものぼると話す（百というこの恐ろしい数字は「連帯」の出版物でも、はくがワルシャワにきてから見た覚えがある）。

「問題の運転手は、ポビェウシコ神父を心から尊敬していた。彼がわしに聞かせてくれた事件当時の状況は、ひとことひとこと、そのまま繰り返して言えるほど、はっきりと覚えているよ」。

「ポビェウシコ神父の死後にも、お墓の仕事を担当した石工（より正確には、彼はmurarzと発音した。壁造り職人という意味になる）が拷問を受けた。お墓の構造、とくにベトン（セメント）の厚みがどのくらいか、警察は厳しく追及したそう。職人は固く口を割らなかつた。隙あらば、お墓をめちゃくちゃに潰してやろう——警察はそんなことも企んだようだ。コストカ教会では人々が日夜、警戒を怠らなかつたから、戦車が柵を乗り越えてくるような事態にはならず済んだが…



「ヤツェク・クローン候補と語ろう」と書かれた選挙運動ポスター。（工藤氏提供）

…」。

「地下出版でも活躍したさ」

ヤン老人は、こんどは秘密出版のためにワルシャワから300キロの教会から重き750キロの印刷用紙を運ぶ苦心談に話が及んだ。荷物運搬用の連結車に載せた紙はずっしりと思い、それをベントウで引っ張るのだ。

「エンジンの具合が悪くなって、というのは、同じベントウでも、これより1代まえのオンボロだったから、きいきいがたがたと大きな音を立て始めた。車を止めると警戒の目をひくから、いちども停車せずに夜中じゅう突っ走ったよ」。

戒厳令下でもタクシーだけは夜間の運転も許されたから、こういう冒険にはヤン老人のような人が役にたったのだろう。重い印刷機を後ろのトラックに積み込んで運んだこともある。そのときは、警察のパトロールに追われて、すんでのことで難をのがれた。

「車の後ろがどうしても下がるから、何か重い品物を運んでいると見破られたらしい。覆面パトカーは曲がり角まで追ってきてわしの車の右横にきた。止まれの合図している。止めたら最期、何か月くらうか知れぬうえ、車を没収されては飯の食いあげた。ちょうど、そこへ後からきた車が警察車とわしの車のあいだに割りこんできた。とっ

さにスピードをあげて右に大きくハンドルを切り、バトカーの鼻面を信号無視で横切って飛ばした。何日かして交通違反の呼び出しがかかったが、そんなところに行くわけがない、とシラを切って通した。あのときは危なかった」。

抵抗軍の兵士は、戦後40数年を経たあと、までも抵抗運動の戦士となった。その目的は変わらない。自主と独立と自由のポーランドを自分たちに取り戻す——それだけである。

サモシチに出るには、ルブリンの街を抜ける。右手にマイダネク収容所跡の広がりが見えると、ヤン老人は話し出した。

「赤軍は、マイダネク収容所の死体処理場の釜が冷えないうちに、ここを接収した。同じ収容所が、そのまま役立てられた。何千ものAKの将兵が捕虜としてマイダネクに収容された。そしてここからソ連へと送られた。シベリアに行ったか、そのまえに殺されたか、どうなったのかは今もわからない」。

「この博物館には、そんなことは何も書いてないはずだ。これからは、そのことも知らさなくては」。ぼくが言うと、ヤン老人は「そのとおり」と頷いた。ぼくがやくしたジェームス・ミッチェナーの長編「ポーランド」では、この収容所も重要な舞台のひとつに使われている。あすこの注釈にせひともこの話を付け加えておかねば……とぼくは思った。

「ユダヤ人は嫌いだよ」

梅田宅に車が戻ったのと時間を合わせるように、スビグニェフ・ブヤクが約束どおりに現れた。アウシュヴィッツ収容所の近くにカトリックの女子修道院があることを巡ってグレンプ首座大司教の発言が国際的な反感を呼んでいた。ブヤクがその話をしはじめた。日刊紙「選挙新聞」が、その演説の主要部分を詳しく掲載して、ユダヤ人側の誤解は片言隻句にこだわるからだと短く論評していたのを思い出し、その紙面を見せに戻ってくると、ヤン老人がいつのまにか、ユダヤ人嫌いの告白をして、ブヤクと梅田の両人から反論されていた。



(写真は工藤氏提供)

ぼくは、いやな話題に耐えられない性格で、ヤン老人に耳を貸す気になれない。彼が何をどう話したか、宗教上のことか、人種上であったか、それともユダヤ人は信頼できないという程度の偏見であったか。いずれにせよ、聞くにも値しないこととぼくが多寡をくくっていたのは事実だ。2人の反論の内容さえ記憶にない。老人の頭に染みついてしまった偏見は、どう説いても消えようもないと、諦めていた気持ちもある。

この人にして、この言あり——昼間じゅう、あれほど感じ入って聞いていた時間と比べて、いかにも興ざめに過ぎると、ぼくはほとんどその場にいたたまれない思いがした。ユダヤ人の問題はポーランドとポーランド人の抱える問題として、現在にまで持ち越されている——そう感じ、そうと知るだけでも、やりきれないではないか。

「ポーランド人のなかにユダヤ嫌いはいなかったか。確かにいた。ユダヤ人のなかにドイツと協力したものはいなかったか。これもいた」。原文と付き合わせての文章ではないから、多少の違いをまめかれないが、グレンプは、戦中を振り返っていくつかの点を列挙していた。喧嘩両成敗、あちらも切れれば、こちらも切る、どちらも悪かったが、これからは、というところに解決を求めているような発言である。

ぼくには分からない。ぼくの理解を越える。ポーランド人対ユダヤ人の確執がそこには剥き出し

になっている。数百万のユダヤ人を殺したナチス・ドイツ、ポーランド人の5人に1人が死んだ第二次世界大戦、ポーランド共産党を破滅させ、開戦の直後、百数十万のポーランド人をソ連奥地に強制移住し、ポーランドから白ロシア・ウクライナを奪い、ポーランドの抵抗運動に残酷に立ち向かったロシア、ナチスと密約してポーランドばかりかバルト海沿岸の3つの国をせしめたソ連の「偉人なる指導者スターリン」、あの男も人のユダヤ人嫌いにかけては、ヒトラーに譲らない。仲のよかつたわけだ。

その戦争の開始から50年の9月1日、ほくは街に出かけられず、共同通信の特派員に依頼された3回つづきの「論評」を書くのに忙しかつた。ヤ

ン老人の車でようやく遠出を果たしたのは、あしたはニューヨークへ飛ぶ前日、3日の日曜日であつた。

ポーランドに行くまえに7週間滞在したニューヨークで、ほくがユダヤ史・ユダヤ人に関する書をたくさん買いこんでしまった心理の陰には、ふたりの凶悪な独裁者の血まみれの手があるように思われる。マンハッタンでは生涯で最も多数のユダヤ人を毎日見かけたが、たぶん、それだけの理由からではあるまい。彼らの多くは、その服装といい風体といい帽子といい、人種・信仰を隠そうとしない誇り高い人たちだ。

(1989年9月11日記)

僕が触れた「連帯」

ポーランド・スタディツアー：木村 元彦

Study Tour to Poland : Yukihiko Kimura

8月14日早朝、クラクフ到着。薄もやに包まれた東駅では夏とは言え大陸性の気候のため、少し肌寒さを覚えた。

ドイツの戦争責任の取り方をテーマに平成初の8月15日にアウシュヴィッツ強制労働収容所を訪問しようというスタディツアーを引率していた私はメンバーの人数を確認し、白い息を吐いた。「オシフィエンチム訪問は明日にして、今日はクラクフ市内を見学しましょう」。

ボズナンから夜行列車による移動であつたせいも手伝って、参加者も少々疲れ気味であつたが、クラクフの息をのむばかりの荘厳な街並みを見るにつけ元気も回復していったようだ。

ゴシック様式の教会の屋根の上には、文字通り切り取つたような青空が広がる。石畳の向こうにはまるでカメラのファインダー越しに構図を取つたように均整のとれた古い家並みが続く。

中世が今、ここにあるようだ。

明けて15日、現オシフィエンチム、つまりアウシュヴィッツへ向けて出発。当初はドイツ名のアウシュヴィッツという呼び方は日本人がソウルのことを京城と呼ぶのと等しいのではないかと思われ、発音することもためらわれたが、現地の人々は割に自然に使っていた。固有名詞としての意味が強いのだろう。

昼食時、ビルケナウ収容所そばのレストランに入る。暑いが温気がないのでさほど喉も乾かない。タイ産の米、ベトナム産のパンジュースが食卓に並んでいた。「ベトナムも食料を輸出できるようになったのだ……」。ジュースが入った缶にははっきりとダナンと記されていた。

「社会主義国？ だめだ！」隣に座つた男がはき捨てるように言った。右手の人差し指で自分の首をかき切るようにしてなおも言う。「ヤルゼルスキ！」

英語字幕スーパーが入つた映像が上映されていた。ちなみに他にロシア語版、ドイツ語版がある。

このフィルム「アウシュヴィッツの解放」は15分ほどの短編記録映画で、ナチの非人道的な行いが徹底してスクリーンに描き出されている。明らかに人員淘汰をねらった強制労働、人間の尊厳を踏みにじる生体実験、収容者からの略奪。

観てゆくうちにふと気がついた。解放したロシア軍の描写が異常にくだい。ロシア人医師がいかにか献身的に尽力したのか、そしてファシストを粉碎してきたのか。案の定、製作はソビエトユニオン。

「これは……」。

他国の歴史、それも身の毛もよだつ悲しい歴史の記録を平気でプロパガンダに使っているのではないか。やるせない気持ちが続いた。

私はボランスキー監督の短編映画、「デブとヤセッポ」を思い出していた。長椅子でくつろぐデブに必死に仕えるヒョロヒョロのヤセッポ。食事をつくる。芸をする。ヤセッポの眼には薬団がすぐ近くに映っている。逃げようとする。捕えられ、足かせをつけられる。

デブはヤセッポを縛る。アメとムチで縛る。アメは1、ムチは5の割合ぐらいだろう。

ヤセッポは逃げられず、デブから与えられた、よりグレードアップした楽器を弾き、狂ったように踊り続けてゆく……。

デブはソビエト、ヤセッポはポーランドという解釈と同時に、デブは党、ヤセッポは労働者という見方もされていることを聞いた。

実際、収容所博物館に来ていた女性に、「今でもドイツに対する国民感情はかなり悪いですか？」という質問をしたら、「もちろんありますが、ソビエトに対して程ではありません」と言われた。

8月16日、バスはクラブからワルシャワへ向かった。山のない国ポーランドは、平坦であるが故に移動自体ものんびりしているような錯覚に陥る。6時間位走っただろうか。ワルシャワの市街地に入って来た。どんよりと曇った空の下で市電が憂鬱そうな音を立てて走ってゆく。

突然、ラジオを聞いていたガイドの女性、ゾフィアが叫んだ。「キシチャクが辞めましたよ。木村さん！」

「速帯」つぶしの最右翼として、「奴は人殺しだ」と何人ものポーランド人が言っていたキシチ



われわれは「速帯」を退ぶ」と書かれた横断幕。(写真は木村氏提供)

ャク首相の辞任!

ヤルタ体制を揺り動かしたこの大きな変革を私はこうしてそこはかとなく知った。あたりまえだが、バス内の景色は何も変わらず、ゾフィアがニコニコしているだけだ。

ピーブルズパワー（実はアメリカンズパワーに他ならなかったのだが）を合言葉にマルコスからアキノへの政権移動を劇的に演出したフィリピンの2月革命に比べてあまりにあっけないものとして私の前へ登場した。

8月17日、トレプリンカ収容所見学。午後、田市街を散策する。「銀製品の小物、琥珀、ウォツカが安いです。添乗員らしい仕事も少しはする。

両替レートは1ドル=6,000ズロチ。これは、間レートに結局、公定レートが合わせる形になった結果である。われわれが泊った宿舎ではビール1本が800ズロチであったことを考えると度はずれたインフレ度がわかる。9月11日現在、レートは1ドル=10,000ズロチにまではねあがっている。

夕方、ワルシャワ大学日本語学科の学生たちと交流する。交流相手の学生の数が少なかったのは、おっとり刀で駆けつけて来た日本のプレスの対応に駆りだされたからだった。自然と対話の内容もソリダルノシチに集中する。

「僕は81年の学園ストライキに参加していました。1週間後に戒厳令になって、たまたま帰宅していたので逮捕されずにすみました」。

「教授、つまり大学当局からの圧力はなかったですか?」「ハハハハハ」笑いながら手を振ったT君は続けて言った。「教授も職員もみんな「連帯」支持ですよ。彼らも一緒にストライキをしていました」。

交流会場はフォルムホテル裏のベトナムレストラン「メコン」。クイテウチャーを口に運びながら、ベトナム戦争の話をした。

「当時のサイゴンには、ユニローヤルの大きなPOP(看板)が建っていて、He knows only three words, "George, Jack, and Uniroyal"と、記されていて、さらにUniroyalのところベンキでけされていて、Yankee go home!と書かれてたんですね」。

自由の国とやらのアメリカの暴力性をどう考え

グダンスクの70年事件記念碑の前で。(写真は木村氏提供)



ますか?と続けて聞こうとしたら、「ポーランドではソビエト、ゴーホームです」とすかさずささぎられた。

反ソ感情これにきわめり、という感じだ。

「辞任したキシチャクに関してはどう思われていますか?」

「彼は人殺しだねえ」。O君が答えた。

「神父とか殺すんですよ。よくね」。

サイゴンビールがまわりだしたのかニコニコしながら恐ろしいことをいう。

8月18日、グダンスクへ向かう。

バスでおよそ6時間。本当に驚くほど平地が続く。北部は湖水地方と呼ばれるだけあって小さな湖が点々と続いている。途中、高校生のJ君が休憩時間に泳ぎだした。

「いやあ、受けをねらった部分もあったんけど、実際気持ちのいいものですね」。

グダンスク到着。ホテルにチェックイン後、すぐさまゾフィアにクリエイストをする。「ぜひ、レーニン造船所へ連れて行って欲しい」。

ゾフィアはげげんな顔をした。

「何故ですか? 今日の日程はオーバ教会と

旧市街ですよ。造船所の中には入れないし、だいたい、行きたがる人は珍しいですね。

「オリーブ教会は明日にまわします。時間が無いのもわかっていますが、私たちはアウシュヴィッツだけではなく、ポーランドの現在も是非知っておきたいのです」。

ピコーズ、ソリダルノシチ、ワズ、イステイプリッシュド、アト、ザット、ブレイス。下手な英語でとにかくブッシュしてみた。

成程ね！という感じでゾフィアはうなづいた。

「では行きましょう。(何の事はない) ホテルから歩いて5分です。こういうツアーのガイドは初めてですが、モニュメントやレリーフの説明をしましょう」。

今回、このゾフィアには本当にお世話になった。添乗業務以外にも親族に不幸があって途中帰国せざるをえなくなった人の帰国便の手配から、身障者の参加者への明るい誠実な対応まで実にきびきびと私たちのツアー成功のために協力してくれた。

当初、ゾフィアという発音が自己紹介の時に聞きとれず、ゾフィー、ゾフィーとわれわれは呼んでいた。君と私はパワフルな彼女の活躍ぶりを見て「さすが、ウルトラマンのお兄さんと同じだね」と感心していたものである。

造船所の第2 通用門の前にはグダンスクの開争の歴史が刻みこまれた3本の塔がそそり建っていた。手前の足跡に入っていると、「それはヨハネ・パウロ2世のものです」とゾフィアの声がした。

「この国の歴史は本当に悲しい。みなさんが見て来たアウシュヴィッツもトレ布林カも、そしてこのレーニン造船所も。この3本の塔と3つの鐘は56年、70年、76年の暴動犠牲者を記念しているのだ。惨殺された当時19歳の若者の碑の前には今でも花が欠かされていない。思わず手を合わせている自分に気がついた。ブッシュ夫妻が捧げたという花束もモニュメント前に盛大に飾られている。

「ブッシュはこの地ではホディガードは不用と言って乗り込んで来たのですよ。当然スタンドプレイもあったのだろうが、どこへ行ってもアメ



ワルシャワで。中央が筆者。(写真は筆者提供)

リカバンザイの声聞いた。

「悲しい歴史ももう終わるでしょう。何故ならポーランドはもう社会主義国ではないから」。これは2日後にマゾヴィエツキ首相就任の報を日本のプレスに通訳した日本語学科のAさんの言葉だ。「私は今日、首相を選びました」。こんな冗談をとぼしながら。

ツアー終了後、私は大使館にあいさつに行った。「今後もポーランドにはスタディツアーを数多く企画して定期的に人を送ってゆきます。その際に……」。少し間を置いて思い切って聞いてみた。「『連帯』のオフィスを訪問するというのは問題ありますか」。対応してくれたPさんはじっと私の顔を見た。「問題ありません。大使館から受け入れ依頼のデレックスを打っていいです。これからは統一労働者党だけの大使館ではないです。人々すべての大使館ですから」。

見慣れたあの時のバスの風景が少し動いた気がした。

米春にもまた再訪してみたい。

(1989年9月14日 きむら ゆきひこ)

ポーランド日誌

1989年6月24日～8月24日

6月24日 「農民連帯」が声明を発表、円卓会議合意の不履行に抗議し、中国天安門事件を非難する。●PAP通信によれば明日からガソリンが50%値上げ。

6月25日 明日からタバコが80%値上げ。この数日間に砂糖68%、アルコール飲料50%、各種生活用品37～67%、タクシー25%などの値上げが続いている。●ルブリン、グダンスク、クラクフでヤルゼルスキの大統領就任に反対のデモ。

6月26日 「連帯」、物価凍結を要求する官製労組全国評議会〔OPZZ〕を無責任と批判。

6月27日 ビドゴシチで交通労働者が賃上げ要求のスト、「連帯」代表も参加して交渉で妥結。

6月28日 「連帯」全国執行委員会〔KKW〕がグダンスクで会合、政府から2閣僚が参加して経済情勢と政府の経済政策を説明。KKWは、手先だけの値上げを批判して構造的な経済改革の必要性を強調する。●1956年のポズナン事件を記念してポズナン、グダンスク、ピエルスコピアワでデモ。

6月29日 ワレサ委員長が記者会見、円卓会議で合意された賃金の物価スライド制が実行されていないと政府を批判。●キエルトヴェ、トルン、ウロツワフなどでストの報。●上院議員に選出されたばかりのG・ピアウコフスキ・ワルシャワ大学長が死去。

6月30日 党中央委員会の会議でヤルゼルスキ將軍が大統領選不出馬を表明、かわりにキシチャク内相を推薦する。中央委員会は再考を要請。●ワルシャワでヤルゼルスキの大統領就任に反対する数百のデモ。

「諸君の大統領、われらの首相」

7月1日 「連帯」系国会議員団が初会合。J・クローンが、党指名の大統領を支持し、「連帯」が首相を出し、組閣すべきである、ただし国防相と内相は党から出す、と提案。議員団としての結論は出ず。

7月3日 「連帯」の「選挙新聞」編集長アダム・ミフニクが同紙に「諸君の大統領、われらの首相」という論文を発表、大統領は党から、首相は「連帯」からと提案〔本紙3頁以下を参照〕。ゲレメク下院議員はミフニクの個人的提案で自分は反対と述べる。●ソ連のゴルバチョフ側近の1人が「どのような政府を選ぶ

かはポーランド人が決める問題」とコメント。●ポーランド駐留のソ連戦車部隊が撤退を開始する。●ワルシャワとクラクフで反ソ・デモの報。

7月4日 上下両院が初会合、議員が宣誓。宣誓文が改められて、社会主義国家ではなく、ただ国家に対する忠誠を誓うもの。下院議長にミコワイ・コザキエヴィチ（統一農民党）、上院議長にアンジェイ・ステルマホフスキ（「連帯」）が選出される。下院でクローンがラコフスキ政権の失政追及を求めたが、議長に却下される。●下院前でのポーランド独立連盟〔KPN〕のデモを警察が規制。

7月5日 バリ訪問中のゴルバチョフ議長、「ポーランド人やハンガリー人がどのような社会をつくるかは彼らの問題。ワレサ委員長との会談には何の障害もありえない」と語る。ゲラシモフ・ソ連政府スポークスマン、ポーランドとハンガリーに軍事介入するいかなる理由もない、と指摘。●上院、昨日の下院前でのデモ弾圧を非難する決議を採択。●カトヴィツェ、グダンスク、ノヴァフタなどで値上げ抗議、ヤルゼルスキ大統領就任反対のデモ。

7月6日 ヤルゼルスキ議長、ラコフスキ首相、チレク中央委員会書記、キシチャク内相、シウィツキ国防相らがワルシャワ条約機構会議のためブレストに向かう。●ワレサ委員長、ゴルバチョフから招待があればいつでも受け入れると表明。●ミオドヴィチOPZZ議長、「彼らの大統領、われらの首相」が実現すれば、OPZZはこれに反対の姿勢をとると述べる。

7月7日 カトヴィツェのチェコ領事館前でチェコの人権活動家投獄に抗議のデモ。

7月9日 ブッシュ米大統領ワルシャワ着。●シチェチンで「連帯」内のワレサ批判派が会合、1980/81年の「連帯」選挙規則の適用を求める。

7月10日 ブッシュ米大統領、ヤルゼルスキらポーランド政府要人と会談。米大使館での昼食会にはゲレメク、ミフニク、クローンら「連帯」関係者も参加。議会での演説で1億ドルの援助その他を提案。

ミフニク、ソ連を訪問

7月11日 ブッシュ米大統領、グダンスクへ。ワレサ宅で昼食、70年事件記念碑に献花などした後、ハンガリーに向けて発つ。ワレサ委員長、100億ドルの「協力」を要請。●ミフニクが講演などのため1週間の予定でモスクワを訪問。●EC外相会議後、デュマ仏外相、ポーランドとハンガリーの改革支持を表明。

7月12日 PAP通信によれば、ヤルゼルスキ議長はミッテラン仏大統領を介してG7に対しポーランドへの経済援助を要請。●英紙とのインタビューでゲレメク市民議会クラブ会長は、「必要な政治的条件が整っていない」として、近い将来の「連帯」政権を否定。ミフニクの訪ソにより、モスクワがポーランドの政治情勢を受け入れるというシグナルを得たと語る。●オポーレ、カトヴィツェ、ボズナン、ウッチ、ノヴィソーンチ、キエルツェ、オルシュティン、ラドムその他各地で保健医療体制の改善を求めるデモ。

7月13日 PAP通信によれば、昨日、クリニツァモルスカのバス停付近で、反対派運動に理解のあったシルヴェステル・ジフ神父が遺体で発見され、捜査が進行中という。

7月14日 ワレサ委員長、ヤルゼルスキ大統領に反対しない、できるかぎり早く大統領を選出することが必要、と声明。●ヴァウブジフで長距離バス労働者200人が賃上げや職業病の認定、管理機構の簡素化などを要求して座り込みスト。

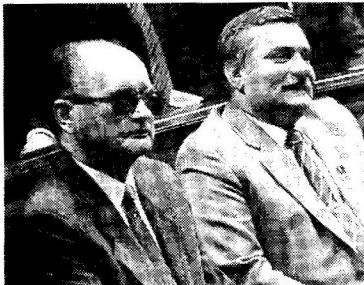
7月15日 バリ・サミットで先進7カ国、東欧の政治改革支持で原則的に一致、ポーランドとハンガリーに対する経済援助問題を討議する。●創設以来紛争が続いているアウシュヴィツのカルメル派尼僧院の撤去を求めて院内に入った7人の米国系ユダヤ人を、ポーランド人労働者が暴行して引きずり出したという報道。カトリック教会は地元の強い反対をおして尼僧院撤去に合意したが、いまだ実現されていない。

7月16日 クラクフでユダヤ人がアウシュヴィツの尼僧院撤去を要求してデモ。●13日からこの日までB・リスがハンガリーを訪問、彼地の独立労組「連帯」や民主同盟、民主フォーラムなどの反対派と会談。

7月17日 ヴァチカン、ポーランドとの外交関係を樹立。●ヤルゼルスキ将軍、市民議会クラブのメンバーと6時間にわたり私的に懇談、キシチャク内相、オジェホフスキ党議員団長が同席。将軍は、戒厳令導入の正当性は譲りなかつたが、それを必要にした情勢の発展には自分にも責任があるとした。また1968年のチェコ介入も正当化した。●EC閣僚会議、ポーランドに対する緊急食料援助に合意。●英国貿易相が5日間の予定でポーランドを訪問。

7月18日 ヤルゼルスキ将軍、党国会議員団会議で大統領選挙出馬を表明。

ヤルゼルスキ、大統領に



7月19日 ヤルゼルスキ将軍、過半数ぎりぎりで大統領に選出される。投票総数544のうち、賛成277、反対233、棄権34、無効7。ゲレメク市民クラブ会長、われわれは責任を自覚して投票した、と述べる。●グディニアで造船所労働者がスト。

7月20日 ゴルバチョフ議長、ヤルゼルスキ大統領に祝電、「ペレストロイカと同じ」根本的改革の前進を確信すると述べる。プッシュキン大統領からも祝電。

7月21日 ゲレメク市民クラブ会長、ワルシャワ放送のインタビューで、統一労働者党、統一農民党、民主党、そして「連帯」による国民統一政府の結成は非現実的と語る。

7月23日 アウシュヴィツで欧州各都市から集ったユダヤ人100余名が尼僧院の撤去を要求してデモ。

7月24日 A・ミフニクらポーランド「連帯」代表団がチェコを訪問、反対派劇作家W・ハーヴェルらと会談。ドブチュク元首相とも会見の予定。

7月25日 ヤルゼルスキ大統領と会談したワレサ委員長は、「大連立政府」への参加を拒否、「連帯」独自内閣を主張し、これが受け入れられなければ「影の内閣」を組織して時機を待つ、と述べる。テレビとのインタビューで「困難の責任だけを引き受けるつもりはない」。●党議員団、8月1日からの食料品価格への市場原理導入を承認。●党機関紙「トリブナルド」が「連帯」代表団のチェコ訪問を非難。

7月26日 市民議会クラブ、党主導内閣への参加拒否を全員一致で決定、個々のメンバーの参加も認めないことに。●シチェチン、スワプスク、ピオトルクフなどの各県で農業生産条件の改善を求めてデモ。

7月27日 市民議会クラブ、ラコフスキ政権の失政を

調査する下院特別委員会の設置とこの問題の憲法法院での審理を要求する。

7月28日 統一労働者党第13回中央委総会開催。●ヤルゼルスキ大統領、グレンプ首座人司教と会談。●8月1日から鉄道、長距離バス料金の50%値上げが発表される。●「連帯」の「選挙新聞」にチェコのドブチャク元首相のインタビューが掲載される。

党第一書記にラコフスキ

7月29日 党中央委総会続行。ヤルゼルスキが政治局員、書記局員、中央委員を辞任。後任第一書記にラコフスキ。ミオドヴィチOPZZ議長も政治局員を辞める。●政府、8月1日からごく一部の例外を除き食料品価格の統制撤廃を決定。

7月30日 下院、賃金の物価スライド制に関する法律を採択。●ノヴァツクのレーニン製鉄所「連帯」、賃上げの遅れに抗議してストを行うと警告。グダンスクのバリコムン造船所その他でストの報。

8月1日 下院で経済問題が討議される。「連帯」系のR・ブガイが重ねてラコフスキ前政権の失政の調査を要求、国有企業のノメクラトウラ層に対する払い下げの監視のため特別委員会の設置を提案。ゲレメクは党の連立政府構想を、「債務相、住宅不足相、非生産的労働省」を「連帯」に押し付けようとするものだと批判。●ブリュッセルで西側主要国による対ポーランド・ハンガリー経済援助問題の討議が始まる。

8月2日 下院、前政権の失政調査のための特別委員会の設置を決定(賛成206、反対119)。次期首相にチェスワフ・キシチャクを選出(賛成237、反対173)。下院に戒厳令下の警察の不法行為調査のための特別委員会を設置(賛成174、反対91)。●ミオドヴィチOPZZ議長、モスクワでゴルバチョフ議長と会談。

8月3日 8月1日からの食料品価格の「市場化」の結果、多くの食料品価格が約3倍に。●「連帯」系上院議員Z・クラトフスカがキシチャク首相の入閣要請を拒否。●各地で交通ストの報。

8月4日 公式週刊紙「ポリチカ」によれば、今年1～6月の間に党員数は3万5,000人減少。活動的党員は全体のわずか25%にすぎず、60%は最低限の活動にも参加していないという。

8月5日 キシチャク首相、ゲレメク、クローン、ブガイら「連帯」系議員と会談、重ねて「大連立」への参加を要請。●各地で交通ストが続く。

8月6日 シチェンで開催中の「連帯」内の反ワレ

サ派組織、「連帯」内民主的選挙実現協定の第3回全国会議が終了。7名からなる書記局の責任者にマリアン・ユルチク(シチェン)。●明日からアルコール飲料が40～50%値上げ。

ワレサ委員長、「連帯」主導内閣を提唱

8月7日 ワレサ委員長、「連帯」と統一農民党、民主党によるいわゆる「小連立」内閣を提唱。●ボズナンとジェシュフで郵便スト。

8月8日 党政治局声明、「ワレサ提案は政府危機を作り出す」と非難。統一農民党はワレサ提案を検討の意向。

8月9日 市民議会クラブが会合。ゲレメク会長を初め一部議員はワレサ提案を事前に知らされていなかったが、あらためてクラブとして正式に採択。●グダンスク「連帯」が賃上げなどを要求して8月11日に1時間の警告ストを呼びかける。

8月10日 ラコフスキ前政権の失政調査委員会が初会合、R・ブガイを委員長に選出。

8月11日 上院、全会一致で1968年のチェコスロヴァキア侵攻を非難する決議を採択。

8月12日 政府機関紙、カティン事件の調査が長引いて国民は我慢できなくなっていると警告。

8月14日 キシチャク首相、辞任を表明。●ウッチの「連帯」組織、8月16日に食料品の急騰に抗議の警告ストを予定。

8月15日 ワレサ委員長、キシチャク首相の辞任声明を歓迎。「『連帯』主導政権の最も重要なポストは党に委ねられるだろう、権力奪取は求めないからだ」。

●ヤルゼルスキ大統領、政治危機解消のため主要な政治的、社会的勢力による合同会議の開催を提案。

8月16日 統一農民党、民主党の議会組織、ワレサ提案の正式受諾を決定、ただちに具体的協議の開始を求める。●ヤルゼルスキ大統領がグレンプ首座人司教と会談、政局について協議。

8月17日 キシチャク首相が正式に辞任、ヤルゼルスキ大統領はラコフスキ党第一書記と事態を協議。ワレサ「連帯」委員長はマリノフスキ統一農民党議長、ユジヴィアク民主党議長らと協議、ゲレメクがヤルゼルスキ大統領と会談。原則問題についてだけ話した、とゲレメク。ワレサ、マリノフスキ、ユジヴィアクがヤルゼルスキ大統領と会談、ゲレメク、クローン、マゾヴィエツキの3人を首相候補として推薦したという。ワレサ委員長は記者団に自分は首相候補ではないと語

る。ラコフスキ党第一書記、「権力の全面的奪取をめざして」党抜きで政府作りが進んでいる、と述べる。ワレサ委員長、ワルシャワ条約機構に留ることの重要性を強調。ソ連外務省スポークスマン、新政権の構成はポーランド人が決める問題として、ワレサ委員長がワルシャワ条約機構順守の意向を表明していることを評価。米ホワイトハウス、ポーランドの非共産党政権を「歴史的事件」と歓迎。●下院、1968年のワルシャワ条約機構軍のチェコ侵攻を批判する決議を採択。チェコ側は内政干渉と反発。

8月18日 マゾヴィエツキ、ヤルゼルスキ大統領と会談後、グレンプ大司教、ケレメク市民クラブ会長、スリシュ「農民連帯」議長、マリノフスキ農民党議長、エジヴィアク民主党政議長、ラコフスキ党第一書記らと相次いで会談。●党政治局会議。明日は中央委員会総会が予定されている。

マゾヴィエツキに首相就任要請

8月19日 ヤルゼルスキ大統領、マゾヴィエツキに首相就任を要請と発表。●「連帯」全国執行委員会、マゾヴィエツキ内閣支持を表明。オニシケヴィチ同スポークスマン、国防、内務ほかいくつかのポストは党に委ねられると語る。●党中央委総会、「連帯」主導内閣を承認。「党の歴史的業績は否定されえない」とラコフスキ第一書記。●ローマ法王、ヤルゼルスキ大統領の決定を「一歩前進」と評価。

8月20日 「連帯」全国執行委員会と市民議会クラブの合同会議がグダンスクで開催。新政権の形成の経過が報告され、両者の協力関係の原則が協議される。●グダンスクの聖ブリギッダ教会でのミサの後、ワレ

サとマゾヴィエツキが支持者に呼びかける。ワレサ：「『連帯』は第2次世界大戦後の欧州分割以来初めて流血なしに画期的な突破口を切り開いた」。マゾヴィエツキ：「ポーランドは首相ではなくパンを必要としている。完全な民主主義と経済再建の道を進まなければならない」。●ルーマニア党機関紙がマゾヴィエツキを反社会主義などと非難する。●上シロンスクの炭鉱地帯でストの報。

8月21日 ワレサ委員長、「連帯」と協力する以外に未来はない、と統一労働者党を批判。●チェコ国境近くの町で21年前のワルシャワ条約機構軍侵攻に抗議のデモ。プラハでは抗議デモでポーランド人、ハンガリー人を含む370名が逮捕される。

8月22日 ビシティアガ党スポークスマンによれば、ラコフスキ党第一書記と電話で話したゴルバチョフ議長は、ポーランド党に全幅の信頼を表明。●党政治局、1939年のモロトフ・リベントロフ秘密議定書は国際法に違反し無効だが、第2次世界大戦後の欧州の国境線は不可侵と声明。●ヤルゼルスキ大統領、大統領付き国務大臣にJ・チレクを任命。

8月23日 下院、モロトフ・リベントロフ秘密議定書の無効と戦後の国境の不可侵を全会一致で宣言。

8月24日 下院、マゾヴィエツキを新首相に選出（賛成378、反対4、棄権41）。ヤルゼルスキ大統領、オジェホフスキ党国会議員団長、マゾヴィエツキ首相就任を歓迎。ソ連政府から祝電。プッシュェ米大統領、サッチャー英首相、コール独首相ら西側首脳もマゾヴィエツキ首相就任を歓迎。ハンガリーのネメト首相からも祝電。 [編訳：水谷 稔]

編集後記

☆激動の夏でした。連立政権とはいえ、「連帯」主導内閣にまで一気に進むとは、当の「連帯」関係者さえ予想もしなかったことだろうと思います。

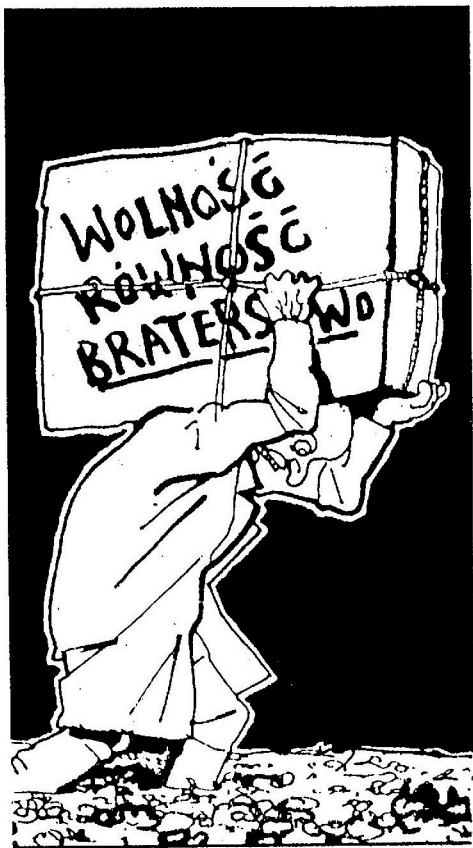
☆7月末に原水禁世界大会参加のため来日したマゾフシェ（ワルシャワ）地区「連帯」委員長のZ・ブヤク氏でさえ、「連帯」政権の成立は秋になるという話でした。この話を聞いたときも、そんなに早く？というが私の偽らぬ感想でした。

☆ブヤク氏とは、8月8日、ごく短時間ながら懇談する機会が与えられました。新しい情勢を迎えて「連

帯」が直面する諸問題について山ほど知りたいことがあったのですが、時間の制約もあってほとんど何も聞くことができませんでした。懇談会での議論の要旨は本誌10～11頁のとおりです。

☆現地情勢の激動に対応して日本でもまたポーランド問題に対する関心が高まっているようです。新聞各紙のほか、週刊誌、月刊誌などで「ワレサ独占インタビュー」の広告を見ます——それにしてもなぜ全部ワレサでなければならぬのでしょうか。

☆激動期のポーランドをこの目で見てこられたお2人から寄稿いただきました。お忙しいところ、ありがとうございました。 1989年9月20日（み）



自由・平等・博愛

発行所・ポーランド資料センター

〒101 東京都千代田区三崎町2-10-5 一国ビル3F
電話 03-261-2585 郵便振替 東京 2-81069

Center for Polish Research %Kazukuni Bldg. 3F 2-10-5 Misakicho Chiyoda-ku Tokyo 101

事務所は月・水・金 14:00~17:00

定価400円・年間定期購読料4600円(送料共)

一九八四年一月二〇日第三種郵便物認可